

Paris Panorama

1860年パリ

Le Nouveau Paris. Histoire de ses 20 arrondissements 新しいパリ—20の行政区の歴史

ISBN 978-4-86340-317-8 ・ A4 ・ c. 520 pp., incl. 41 col.

定価 本体 **46,000**円+税

Histoire des environs du nouveau Paris 新しいパリの近郊の歴史

ISBN 978-4-86340-318-5 ・ A4 ・ c. 500 pp., incl. 48 col.

定価 本体 **46,000**円+税

別冊解説：小倉 孝誠・慶應義塾大学教授

**第二帝政期に拡張して新たな区割りに再編されたパリと
その周辺地域についての同時代重要資料！**

拡大して現在に通じる20区に再編されたパリ市の行政区とその周辺23地域について、その歴史を詳述！
挿絵はこの時絶頂期を迎えんとするGustave Doré！

Athena Press

Le Nouveau Paris. Histoire de ses 20 arrondissements 新しいパリ—20の行政区の歴史

Émile de La Bédollière

Illustrations de Gustave Doré

Paris: Gustave Barba, 1860

定価 本体 **46,000** 円+税 ISBN 978-4-86340-317-8 • A4 • c. 520 pp., incl. 41 col.

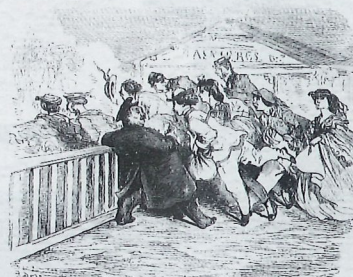
Contents

Histoire générale de Paris

(1) Le Louvre • (2) La Bourse • (3) Le Temple • (4) L' Hôtel de Ville • (5) Le Panthéon • (6) Le Luxembourg • (7) Le Palais-Bourbon • (8) L' Élysée • (9) L' Opéra • (10) L' Enclos Saint-Laurent • (11) Popincourt • (12) Reuilly • (13) Les Gobelins • (14) L' Observatoire • (15) Vaugirard • (16) Passy • (17) Batignolles-Monceaux • (18) Les Buttes Montmartre • (19) Les Buttes Chaumont • (20) Ménilmontant

Dictionnaire des besoins usuels dans Paris

Dictionnaire topographique, historique et étymologique des rues de Paris (par Alfred Delvau)



Histoire des environs du nouveau Paris 新しいパリの近郊の歴史

Émile de La Bédollière

Illustrations de Gustave Doré

Paris: Gustave Barba, 1860–61

定価 本体 **46,000** 円+税 ISBN 978-4-86340-318-5 • A4 • c. 500 pp., incl. 48 col.

Contents

Sceaux • Meudon • Versailles • Saint-Cloud • Le Mont-Valérien • Marly-le-Roi • Saint-Germain-en-Laye • La forêt de Saint-Germain • Asnières • Enghien • Saint-Denis • Romainville • Vincennes • Choisy-le-Roi • Montrouge • Le Raincy • Fontainebleau • Pontoise • Chantilly • Compiègne • Mantes • Chartres • Rambouillet

Dictionnaire général des environs de Paris

【付録】別冊解説



本書について

著者 Émile de La Bédollière(1812–1883)は“de Labédollière”の筆名を用いることが多かった19世紀中葉のよく知られた文筆家です。著作は歴史ものが多く、翻訳もこなしました。またゴッットにも親しんでいました。1860年に刊行された『Le Nouveau Paris. Histoire de ses 20 arrondissements』はすなわち第二帝政中期のオスマン知事のもとでのパリ改造の最中に出たものです。Gustave Barba 社から週刊形式で刊行され、新しくなったパリ全20区の歴史を各号毎ひとつずつ取り上げています。それぞれの号は16ページ2段組みの構成で、Gustave Doré(1832–1883)の挿絵が入り、見開き2ページの色刷りの地図が加えられています。地図には区を構成するカルティエ、通り、公共建造物が示されています。

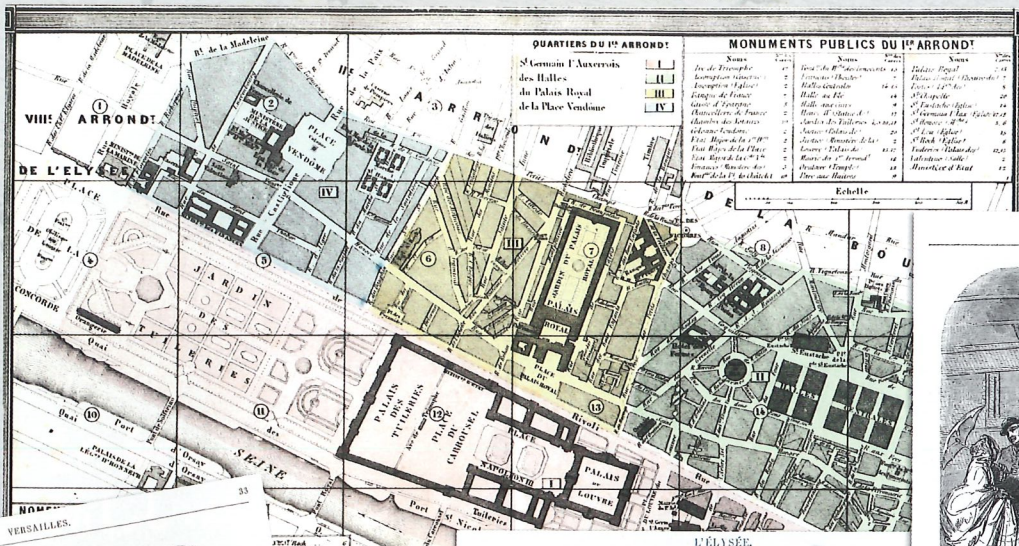
さらに本書には色刷り折り畳みのパリ全体の大判地図が付いているほか、55ページからなる実用情報の一覧が付いています。これは当時の生活を垣間見ることのできる貴重なものであり、公衆浴場、クラブ、ホテル、駅、乗合馬車や配送サービス、新聞や雑誌、出版社、職業紹介所、各種税率表、度量衡、保険会社、オークション、公園、博物館や図書館、病院、刑務所、裁判官、政治家、教員、さらにはベディキュアまでが掲載されるなど多岐にわたり、それらの住所と営業時間が示されているものも多々あります。巻末に Alfred Delvau(1825–1867、19世紀半ばの著名な著述家、ジャーナリスト)によるパリの「通り」事典が付されます。

著者はさらにパリ近郊についても書き進め、『Histoire des environs du nouveau Paris』を前著と同様 Barba 社より、1860年11月から週刊形式で刊行します。編集は同様の形式です。パリ近郊の23の地域を扱い、それぞれについて、本文と Doré の挿絵を16ページに収め(ベルサイユのみ20ページ)、見開き2ページの色刷りの地図が加わります。巻末には72ページの簡易な地名辞典と近郊の概略地図が載ります。

この2著に用いられた挿絵は約140点、この時絶頂期を迎えようとしていた Gustave Doré によるもので、彼の評価を高めることになるダンテ『神曲 地獄篇』の挿絵の発表は同時期でした。

本2著は、パリとその周辺が現在の形状になった時代を描いています。パリの歴史、第二帝政研究、出版研究、挿絵研究、都市計画研究に関心のある方々にとって価値の高い資料です。

1^{er} ARRONDISSEMENT DU LOUVRE



L'HOTEL DE VILLE.

49

L'HOTEL DE VILLE. — QUATRIÈME ARRONDISSEMENT.

CHAPITRE PREMIER.

Frontières du IV^e arrondissement. — Les quatre parties. — Le Petit aux Bourgeois. — La Mairie de Grève. — Organisation des Bureaux de la Ville. — Fondation de l'Hôtel de Ville. — Église de Saint-Jean en Grève et de Saint-Etienne. — Inscriptions sur la première pierre de l'Hôtel de Ville. — Cérémonies politiques.

Le IV^e arrondissement est un de ceux qui ont subi le plus de métamorphoses depuis que le gouvernement et la municipalité parisiens ont entrepris la réforme de la capitale. Divisé en deux parties distinctes sur la Seine, il comprend à la fois

conquête du vieux édifice municipal? Et pourtant, chose digne de remarque, Paris n'a jamais eu de charte communale; l'autorité de ses magistrats électifs s'est formée par la suite des âges, favorisée par les rois, sans que les habitants, comme en d'autres localités, aient recouru à l'intervention pour s'affranchir des rigueurs de leurs seigneurs.

En 1711, on trouva sous le chœur de Notre-Dame de Paris, où l'on creusait un caveau pour la sépulture des archévêques, une pierre sur laquelle on lisait :

VIR. CESAR
AUG. 2011 OPTIMO
MAXIMO.



Le Café Concert.

L'ÉLYSÉE. — HUITIÈME ARRONDISSEMENT.

CHAPITRE PREMIER.

Le pont de la Concorde. — Statues projetées en exécution. — Place de la Concorde. — Statue de Louis XV.

Pour passer du VII^e au VIII^e arrondissement, nous traversons le pont qui fut sans contestation considérée comme le plus monumental de tous les ponts de Paris. Son auteur, Jean-Baptiste Bernini, était membre de l'Académie des sciences, de celle d'architecture et de celle de Stockholm, membre de la Société royale d'agriculture, premier ingénieur des ponts et chaussées de France, directeur de l'École des ponts et chaussées, établi à cette époque sur la Seine et

la construction de cinq arches fut plutôt hâtée que retardée par la Révolution, car on y remplaça une partie des matériaux provenant de la démolition de la Bastille.

En 1792, le pont fut élargi sous le nom de Pont de la Révolution.

En 1793, la haine terrible qui s'était emparée contre l'ancien régime et le nouveau commença à s'apaiser, tous les partisans n'avaient qu'un espoir, à la constitution, et le pont de l'ingénieur Bernini perdit sa qualification de pont de la Concorde.

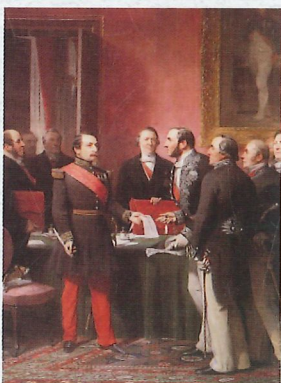
Napoléon I^{er}, par un décret du 1^{er} janvier 1806, ordonna qu'on y plaçât les statues de quelques généraux morts sur les champs de bataille, Saint-Hilaire, Bessières, Lasalle, Gervais, Lannes, Hesse, Fouché et le duc de

本書刊行時のパリをめぐる状況

1860年1月1日、18世紀末からフェルミエール・ジェネローの城壁によって区切られていたパリ市域を、七月王政の間に建造されたティエールの城壁まで拡張する法律が発効、旧市域に隣接する町村（コミューン）の、11か所のほぼ全域と、13か所の部分がパリ市域に構成されることになった。これらの編入によって市域は面積が旧来の2倍以上（約33平方キロメートルから71平方キロメートル）、人口についてはほぼ1.3倍（およそ120万人から160万人）となり、行政区についても12区から20区へと増えて現在もその形で続いている。

ほぼ全域を取り込まれたコミューンは、オートウイユ、パッシー、パティニョール・モンソー、モンマルトル、ラ・シャペル、ラ・ヴィレット、ベルヴィル、シャロンヌ、ベルシー、グルネル、ヴォジラール。一部を取り込まれたコミューンは、ヌイイ、ヴァンセンヌ、イヴリー、ジャンティイ、モンルージュ、ル・プレ＝サン＝ジェルヴ、クリシー、サン＝トゥアン、オーベルヴィリエ、パンタン、ヴァンヴ、パニョレ、イシー。

パリの拡張はオスマンの最も重要な業績であるといえるだろう。政治的には「入市税」の徴収と、増加する貧困層や労働者階級—特に北部から北東部—の対策もあった。当時もどこの居住地区は別として、入市税がかからなかったフェルミエール・ジェネローの城壁外の地域は、家賃や生活費が安く済む場所を求めた多くの職人や労働者階級が引き寄せられて徐々に産業化が進んでいた。特にセーズ川沿いや運河沿いで顕著で、後には鉄道沿いの地域がそうした状況を示した。こうした郊外に当たる地域はパリ市中央部よりも急速な発展を見せたが、それは近隣からの人の流入に加え、オスマン改造の進行とともにパリ市中央部がますますブルジョワ化するなかで土地投機や賃料の急上昇が生じ、そこから労働者階級が流出したことも要因であった。結果、改造時に新たに加わった郊外の行政区は、今日に至るまで首都の中で空間的にも社会的にも独特な存在を保っている。



Adolphe Yvon, « Napoléon III remettant au baron Haussmann le décret d'annexion des communes limitrophes, 16 février 1859 » (1865), Musée Carnavalet, Paris.

第二帝政期のパリと近郊を活写する記念碑

小倉 孝誠 ● 慶應義塾大学教授

この度「パリ・パノラマ」シリーズの一環として、エミール・ド・ラ・ベドリエール (1812-1883) の2冊『新しいパリ——20の行政区の歴史』と『新しいパリの近郊の歴史』(ともに1861年) が同時に復刊されることになった。慶賀の至りである。アティーナ・プレス社はこれまで『パリの悪魔』、『大都市』、『パリあるいは百一の一書』などパリに関するいわゆる「生理学」ものの代表作を多く出版してきた。今回そこに、ラ・ベドリエールの著作が加わって、シリーズはさらに充実したものになる。これらが複数の著者による共著だったのに対し、今回の2冊は単独の作家による著書という点が特徴である。

刊行年もまた大きな意味をもつ。『パリの悪魔』以下の三作は、いずれも19世紀前半に刊行されている。そこで語られ、分析されているのはロマン主義時代のパリであり、バルザックが『人間喜劇』の中で描いた世界である。また、やはりアティーナ・プレス社から復刊されたエドモン・テュシェ著『タブロード・パリ』全2巻は19世紀半ば、1852-53年の出版である。しかもこの本は、週刊新聞『イリュストラシオン』に連載された記事に加筆修正を施したものであり、実際は1840年代後半の首都の風景と習俗を叙述している。

他方、ラ・ベドリエールの手になる2冊は1860年代初頭に刊行された。その10年間にナポレオン三世の第二帝政が成立し、セーヌ県知事に抜擢されたオスマンによってパリ大改造が始動している。1860年には、周辺の町村を併合してパリ市は現在のような20区を布く大都市に変貌した。それにともない市の面積は倍以上に広がり、人口は150万を超える。ラ・ベドリエールの『新しいパリ——20の行政区の歴史』は、まさに近代都市に変貌したパリの新たな表情を読者に知らしめようとしたのである。オスマンの改造事業によって日々変貌しつつあったパリの町を、リアルタイムで歩き回り、その様相と人々の活動を描き出そうとした。その意味で、オスマンのパリ、「19世紀の首都パリ」(ベンヤミン)の状況を伝えてくれる最初の著作のひとつなのである。

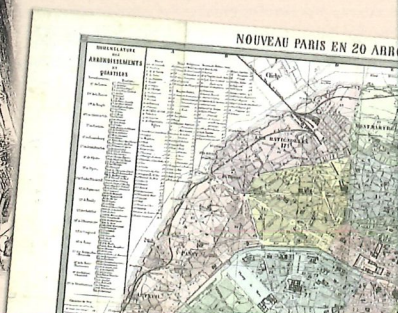
ラ・ベドリエールは青年時代からジャーナリズムの世界に入り、当時を代表する新聞『シエクル』紙や『ナショナル』紙で活躍し、歴史書も

数冊執筆した。外国語にも堪能だったようで、ドイツのホフマン、イギリスのディケンズ、そしてアメリカのストウ夫人の作品を翻訳した経験をもつ。この度復刊される2冊は、ジャーナリストとしての嗅覚と、歴史家としての素養がみごとに融合したことを示す仕事といってよい。

『新しいパリ——20の行政区の歴史』は冒頭に「パリ全史」を配して、パリの起源から19世紀半ばまでの歴史をたどった後、1区から20区まで、区ごとに叙述を展開する。街区の描写や新旧のモニュメントに加えて、「生理学」ジャンルの伝統に倣って、パリ住民の生活と深くつながる空間や社会制度や公共機関が記述の対象になる。その基底にあるのは、パリへの深い愛と敬意にほかならない。「パリは文明の中心であり、あらゆる知識が集中する都市である」と著者は宣言する。第二帝政期のパリをめぐるこのような認識は、1867年のパリ万博を機に刊行される有名な『パリ案内』全2巻に継承されることになる。

続篇である『新しいパリの近郊の歴史』は、パリから数十キロ以内に位置する主要な町(ヴェルサイユ、コンピエーニュ、フォンテーヌブローなど)を対象にして、その歴史、産業、建造物、自然などを詳細に記述する。どの町を取りあげたかという基準は、鉄道で日帰りできるといきわめて明解なものだ。産業革命の象徴である鉄道は第二帝政期に大きな発展を遂げ、パリを中心とする幹線網が確立した。パリから汽車に乗り、町を見物して、夕方には帰宅できる。この書物はそのような人のための旅行ガイドブック的な側面を兼ねている。大型本なので実際に旅行者が携帯できるものではなかったが、同時期に、アドルフ・ジョアンヌ(1813-1881)が鉄道で旅する人のためにポケットに入るような旅行案内書を刊行していた。形式は異なるが、そこには同じ精神が通底している。

ラ・ベドリエールの2冊の本には、時代を代表する挿絵画家ギュスターヴ・ドレ(1832-1883)による鮮やかな版画が数多く添えられており、著作の価値をぐっと高めている。大規模な改造によって誕生したオスマンのパリと、鉄道によって変わった人々のライフスタイル——それが新たなパリ論の構図を成立させたのだった。



【発行】

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

Tel: 03(3946)2117 Fax: 03(5977)8026

E-mail: eigyo@athena-press.co.jp

http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】